

家 山に生きるよりどころ



旧家筋に当たる家のたなすまい。昭和期の建築で、細部は縁の細い白木の建具がしつらえられたが、屋敷全体には重厚な古民家のおもむきが受け継がれている。

人にとって、家屋敷はくらしのよりどころであり、生きていくためのさまざまな営みの場となった。
仙台藩の「御番所」であったと伝わる丹沢の早坂林右衛門家は、解体調査によれば近世後期の建築と推定された。屋敷の北と西はイグネ（屋根葺）の杉材でおおわれ、季節風を防いだ。屋敷の周囲には丹沢川からひいたホリツコと呼ばれる水路が走り、生活用水全般に使われた。母屋の南の端はロウソク（露窓）といひ、さまざまな作業の場である。母屋西のヒロマは思み籠り身を清めて船形山神社祭礼のオマスを細工する小屋であり、その西のキゴヤ（木小屋）には燃料として薪がたくわえられた。



新築祝（住民所蔵写真）



木蔵



土壁



木端葺の屋根



台所



火棚



かまど



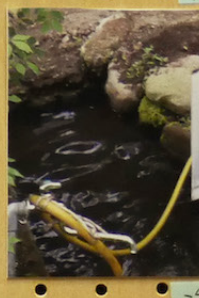
水



洗



水



洗



水路から水